

その他（翻訳）

Charlotte M. Brane 著『ドナ・ソーン (Dora Thorne)』（翻訳・その14）

堀 啓子

前号に引き続き、『ドナ・ソーン (Dora Thorne)』の翻訳を掲げる。原著は長編物語であるため、分載十四回目となるこのたびは、第十九章の訳を掲げることにする。猶、原著も前号に引き続き Dodo Press の二〇一〇年リプリント版に拠るものとした。

*本稿は、科学研究費補助金【基盤研究 (C)】「課題番号…15K02264」による研究成果の一部である。

十九章

困惑と狼狽がアール邸をおおっていた。うだるように蒸し暑い八月のある朝、アール卿はその暑さを気にも留めず、庭に出て行った。昼食に戻ってこないで執事が探しに行き、死んだように倒れている主人を見つけた。アール卿は自身の部屋に担ぎ込まれ、近在遠方

を問わず、医師たちが大至急呼び集められた。医学や愛情、技術や叡智の全てを以てしても行った処置のすべては無駄だった。彼が邸宅や地位、富、そして何よりも重んじていた爵位のすべてから離れなければならぬ時がやってきた——人生を集大成し、人生で成し遂げたこと、富や才能、息子について全てを神に述べるそのとき、人々の情や愛は何の役にも立たなかった。

それでも、アール卿が青ざめた顔で意識もなくベッドに横たわっている間中、そばにひざまずき、片時も離れなかったアール卿夫人は、夫の精神や心が完全には失われていないのを確信していた。話すこともできず、こちらの話も理解できているようには見えなかった。不安な沈黙の中で、永遠の光がその人物の過去をはっきりと照らし出している間、何が起きているか、何もかも知っている人があろうか？ 横たわり、いわゆる二つの世界の間をさまよっているよ

うな間、息子の思い出が諸刃の刃のように彼を切りつけた——その息子を彼は一人息子として教育し、この世のみならずあの世までも——彼が愛し、大切にし、そして放逐してこの世界のどこかをさまようまでにさせてしまった。恐らくこの新たな光に照らされる中で彼は、頑固で重々しいプライドや、そして傲慢な意思、本能と義務を踏みつけにした自らの決心の固さが招いた結果を思い知ることになったのだった。恐らくは自身の言葉が彼に跳ね返ってきて、彼が死んで横たわるまでロナルドはアールズコートには決して戻らないのだった。突然、誰もが聞いたこともないような静かな声が、この死者の部屋に奇妙に響いた。

「我が息子よ！」両手を握りしめ、この死にゆく人は叫んだ——
「我が息子！」

彼がこの最期の言葉を発した時、そのうつろな顔に浮かんだすさまじい恐怖の表情を、人々は決して忘れることはなかった。

人々は涙にくれる妻を部屋から連れ出した。意志の強いしつかりとした女性であったが、アール卿夫人はこの光景を記憶から追いやすることはできなかった。彼女は何日もの間、体調をくずし、そのためにこのアールズコートの主は長い間、家族の納体堂に安置され、エルムスの人々は彼らに訪れることになる変化を何も知らなかった。

ロナルドは大至急呼び戻された。しかしこの報が彼に届くまで数か月を要し、彼がイギリスに戻ってくるまでにはさらに時を待たな

ければならなかった。

アール卿の遺言は短く、息子の名は書かれていなかった。アール卿夫人には相当の条項があり、彼女は、ロスリンのあの美しいこじんまりした土地を相続した。使用人たちもかなりのものを遺された。ハリー・ローレンス卿とヒュー・カーテリス卿には、すばらしいモーンニング・リング(亡き人を偲ぶために贈られる指環。故人の名前や忌日、イメージや主義などが刻まれることが多い。)が遺贈された。だが最愛の息子であった、正当な後継者については何もふれられていなかった。

法に則れば、全てはロナルドのものだった——故人の蓄えた巨万の富や、爵位、不動産の全てがロナルドに帰すのだった。だがロナルドは、彼が愛してやまなかった父親からのたった一行の許しの文言、たった一言の赦しを得るためならすべてをなげうったであろう。

ロナルドが戻るまでの間、母親が引き続きアールズコートに在住し、不動産の管理は、一家の顧問弁護士のパート氏に託されることになった。

アール卿夫人は、自身でエルムスに赴くことにした。そこでは大きな変化が起きるはずだった。ロナルドの妻と子供たちはその地位を受け継がなくてはならない。ドラが将来的に彼女の立場を確かに引き継ぐことができるのは、アール卿夫人の分別ある賢明な取り仕切りのおかげであり、そう考えることに彼女は誇りを持っていた。美しく、教養の備わった娘たちに会ったときには、ロナルドも喜ぶであろうと夫人は考えた。大きな悲しみにのさなかにも関わらず、

このアールズコート的女主人は未来にいくばくかの期待を感じていた。彼女はエルムスに手紙を書き、夫の死と彼女がエルムスに赴くことを伝えた。そしてこの一家は、彼らの静かで寂しい生活が完全に終わることを理解した。

まずは丁寧な哀悼の意が表された。ドラはずっと奇妙に沈黙し、ふさぎこんでいた。子供たちは、ずっと会いたがっていた父親について数え切れぬほどの質問をした。子供たちは、父親がその父親と喧嘩をして家を出たとは知っており——それはアール卿夫人が教えていたことだが——よもやドラとの結婚がその運命的な不和をもたらしたとは予想だにしていなかった。アール卿夫人が子どもたちの母親のために、注意深くすべての事実を包み隠したために、子どもたちは何も知らないままだった。

アール卿夫人は九月の初めのある夕べ、エルムスを訪れた。彼女はまず、ドラ一人とだけ話したいと望んだ。

長い年月の間に、ドラは、この気品高く優しいロナルドの母親を愛するようになっていた。その優しくて上品な威厳と、愛嬌のある態度に、ドラは抗えなかった。そのため、孫娘たちに会う前に、夫人がドラの部屋を訪れてしばらく相談したいと望んだ時も、ドラは優しく敬意を込めた愛情を以て、彼女を迎えた。

「まずあなたに会いたいと思いました。」とヘレナ・アール卿夫人は言った。「そうすれば、子供たちが自分たちのことを知る前にい

ろいろと決めることができますから。ロナルドは数か月後にイギリスに戻ってきます。ドラ、あなたはどうしますか？」

「何も」と彼女は答えた。「あなたのご子息のご帰国は私には何の関わりもありません。」

「でもきつ」とヘレナ夫人は言った。「子どもたちのために、少なくともうわだけでも和解しようということは拒否しないでしょう？」

「ミスター・アールは和解については何もおっしゃいませんでした」とドラは言った——「そして今後もおっしゃらないでしょう、ヘレナ夫人。あの方のお考えと私の考えは全く相容れないのです。」

この言葉に仰天したアール卿夫人は、しばらくものも言えずに座りこんでいた。

「私はあなたがたの不和の原因が何かは決して尋ねませんでした、ドラ。」と彼女は優しく言った。「それを知りたいとも思いません。息子はあるとはもう一緒に住まないと申しました。私は夫を愛しておりました。私は献身的な愛情を持った妻でした。私は夫の欠点には目をつぶり、夫の美德を愛しておりましたので、あなたの立場ならばどうすべきかはわかりません。あなたに言うべきことはロナルドにも言うことです——あの莊嚴な文言——「神が合わせられたものを、人は離してはならない」(『マタイによる福音書』19章6節)。私の意見を申

しましょう。あなたがたのような離別は正当化することはできません——ただ、最も暴力的な犯罪や野蛮で残酷な行為を除いては。ドラ、正しい選択をなさい。夫に従いなさい。私を信じて。女性の権利は全くの幻想で無意味なものです。愛情を持った優しい従順さこそが女性を最も美しく輝かせるのです。もしロナルドが過ちを犯したとしても、自尊心やかんしゃくをおさえて、彼を立てなさい。」

「できません」とドラは重々しく言った。

「ロナルドは常に寛容で紳士的でした。」とアール卿夫人は、続けた。「ああ、ドラ、私の息子があなたのために、どのように全てをなげうったか忘れてしまったのですか？」

「いいえ」と彼女は苦々しく言った。「彼も忘れてはいないでしょう、アール卿夫人。」

自分の犯した過ちの記憶が鮮明に蘇った。再び、ヴァランティン・カーテリスの、あの静かな、育ちの良さを感じさせるすばらしい美貌が眼前に浮かんた。同時に、怒りと憤慨で青ざめ、言葉にはならない軽蔑を表していた夫の顔も浮かんた。ああ、決して二度と！あの仲たがいを癒すものなどありえるはずはなかった。

「あなたは自分の立場を受け継がねばなりません。」と、アール卿夫人は続けた。「あなたはもはや、エルムスに住むただのミセス・アールではないのです。あなたはアールズコートのアール卿夫人で

あり、貴族の妻で、その子供たちの母親なのです。あなたは、私が教えねばならない夥しい義務を負い、ひるんではならないのです。」

「全てをお断りします。」と彼女は静かに言った。「あなたのご子息の爵位も富も地位も義務も、共に負うことをお断りします。和解に向けては何もしませんし、受けいれるつもりありません。」

「でも、なぜ？」とヘレナ夫人は重々しく尋ねた。

興奮したドラの顔は赤くなった——激しい怒りがその心をかき乱した。

「あなたのご子息が、私には決して忘れることのできない、そして忘れるつもりもない言葉を私に言ったからです」と彼女は叫んだ。「私は過ちを犯しました——ヘレナ夫人。私は錯乱し、嫉妬して、何もわからなくなり——間違いを犯したのです——不名誉で品位のないことだと今はわかるようなことをしてかしました。私は知恵がまわらず、それを知っていた彼は私を許してもよかったのです。ですがライバルだと私が思っていた相手の女性の前で、彼は私を妻にしたことをひどく後悔したのです。」

「それはつらい言葉でしたね」とアール卿夫人は言った。

「とても」と、ドラは答えた。「その言葉は私の心を壊し——私は若くして殺されました。以来、私は死人も同然でした。」

「許し、忘れることはできないのですか、ドラ？」とヘレナ夫人は尋ねた。

「決して」と彼女は答えた。「その言葉は私の心と脳裏に焼きついていきます。忘れることはありません。生きている限り、あなたの息子と私は他人同士でなくてはなりません、アール卿夫人。」

「ではもう何も言いません。」アール卿夫人はため息をついた。「おそらくは神の声があなたに呼びかけるとき、ドラ、あなたは従うことになるでしょう。」

重い沈黙が二人の間に落ちた。ヘレナ夫人は、案じていた以上のことに悲しみ、狼狽していた。彼女は喜んで、息子の妻と子供たちを連れて帰ろうと思っていたが、そうはならなかった。

「では子どもたちの話をしましょうか？」とようやく彼女は尋ねた。「あの子たちの処遇を考えなくてはなりません。」

「わかりました」とドラは言った。「父親はあの子たちを求める権利があります。私はそれに従います。あの子たちは私の子ですから、彼があの子たちを愛して世話をしてくれるかはわかりません。それでも、私はあの子たちを彼とあなたにお渡しするつもりです、ヘレナ夫人。あの子たちは人生のうちで最も愛らしい最良の時を私のもとで過ごしました。ひとつだけ約束してください。それはあの子た

ちが私の悪口を一言たりとも耳にしない、ということですよ。」

「もしそんなことがありうると思っているならば、私のことをあまりわかっていないようですね」とヘレナ夫人は言った。「そんなことを思うぐらいでしたら、子どもたちと別れるよりもむしろあなたが連れて来るほうがよいでしょう。」

「そうですね」と彼女は応じた。「あなたは、子どもたちが私を訪ねてくることをお許し下さるでしょう、アール卿夫人。こんな時が必ず来ると、私はずっとわかっていましたし、準備もしてききました。」

「ですが、ねえドラ」と、アール卿夫人は温かい声で言った。「子どもたちと別れるということがどんなことなのか——その孤独や寂しさを考えたことはあるのですか？」

「全てわかっています」とドラは答えた。「つらいことですが、同じ屋根の下であの子たちの父親と一緒に暮らすことほどつらくはありません。」

注意深く、静かに、ドラはアール卿夫人の計画と予定——子どもたちがどのようにアールズコートに入り、地位を得ていくのか——を、聞いていた。ヴィヴィアン夫人と一緒にいくことになり、アール卿が戻るまで滞在することになった。そしてそれまで、彼女たちの社交界でのお披露目は待つことになった。子どもたちをこれほど

大きな変化に慣れさせるためにも、いくばくかの時間は必要だった。アール卿が戻れば、彼がそのプランを進めることになる。

「彼は子供たちのことをとても誇らしく思うでしょう！」とアール卿夫人は言った。ベアトリスほど活気に満ちた美しい少女も、リアンほど愛らしく優しい少女も見つたことはありません。ねえ、ドラ、あなたが一緒に来てくれたならば、本当に嬉しいのですが。」

この慌しい準備の数日間に、ドラの誇り高い気概は一度も崩れなかった。少女たちは初め、彼女から離れることを拒んだ。母親がエラムスに住み続けることの理由を推し量ることに疲れ、彼女たちは、アール卿夫人があっさりと言った、彼女たちの母親は個人の私生活を失うことに耐えられないという理由に納得せざるを得なかった。

「お母様は今では爵位があるのに」と、ベアトリスはいぶかりながら言った。「どうして受け継ごうとなさらないのかしら？」

「あなたがたのお母様は素朴であっさりした生活を好むのです」と、アール卿夫人は言った。「お母様の望むことには敬意を払うべきです。」

家を明るくしていたきれいな二人の顔が見えなくなるまで、ドラは気を張っていた。彼女たちが去り、予想外の静まり返った家の中で、誇りと勇気がくずれおちた。そのとき、まさに死のような苦しみが彼女を襲ったのだった。

(以下、次号)